

廣辭林

第六版

三省堂編修所 編

言語は時間とともに変遷する。変遷の様相は多様であり、同時に法則的ではあるが、その速度は、長い歴史の中で、時期により必ずしも一定ではない。音韻をはじめとして文法・語彙はもちろん文字や表記に至るまで、およそ言語現象のすべて、変遷の埒外ではないが、その変化はこれまた必ずしも併行的には起こらない。言語を用いる個性すなわち人間が、次々に生起消滅し、あるいは各地域へ分散集中し同化する中で、また、異文化との接触の過程で、社会生活・文化的創造等における人間の言語活動の結果として、言語は常に静かに変化していく。速度を早める要因に若者たちがおり、年輩者から言葉の乱れと聲^{しん}覺^{かく}をかい、言葉を正そうという力が変遷の速度をゆるめる。その両方の力の均衡が少しくずれ、言語は変遷する。従って実は、言語が自ら変わるのではなく、その使用主体たる人間の生々しい営みの中で、人間が変わり、人間が言語を変化せしめるのである。

人間が移ろい、言語が変遷する中で、なおかつ言語にはしかし変わらざる部分も少くない。微妙なずれがないとは常に断言はできないが、基本的には変わらざる部分がむしろ多い。ここに、現代に生きるわれわれを、言語文化の上限である古代にまでつなぐ直接のきずながある。現代の文化の後背地としての過去に、われわれは言語を通じてむすばれている。

こう考えるとき、およそ辞書には、その編修の性格に、自覚のあるなしにかかわらず、二つの立場が認められる。一つは、その対象とする言語を時間的な流れにそってとらえる立場である。一つは、言語を現在の視点でとらえる立場である。前者は、古代から現代に至る時間の流れとともにある言語を、その流れにに応じて、あるいはその流れの一時期を区切って、そのままにとらえ記述する方法であって、言語辞典や時代別辞典はその典型である。後者は、常に時間とともに歩んでその先端に存在し、常に現在を中心に言語をとらえる。その記述する対象は、必ずしも現代語であるとは限らない。この立場では、過去も、現在を起点に、その現在の必要とする過去の言語文化を収める。本書はまさに、この後者の立場にある。

明治四十年に、本書が、言語学の泰斗金澤庄三郎博士の手により成つて以来、脈々として生き続け、今まさに七十七の寿を迎えようとしている。この間、とりわけ昭和前半期においては一世を風靡し、識者により広辞林時代とよばれたその呼称にふさわしい充実をみ、その充実は、時代の情報の増大に応じて今日さらに豊かにふくらみをみせている。わが国で、後続の辞書編修の底本となつたばかりでなく、日本を代表する辞書として海外の日本語研究の基盤となつてゐる。初版より数えて六度目の版を改めて、今第六版を世に送ろうとしているが、本書の基本的な立場は、一貫して常に現在、とともにあることに変わりがない。現在は時間とともに進行する。明治四十年初版の時点で真に現代に生きた本書は、昭和三十三年の四版においてまた現代に生き、今日また現代に生きている。これが本書の伝統の真骨頂である。明治四十年の現在は、すでに大正十四年第二版の現在ではなく、大正十四年は昭和九年第三版の現在でもない。昭和九年は昭和三十三年ではなく、まして今日の第六版の現在ではない。現代に用いられる日常語である和語（本来の日本語）・漢語（もと外来語であつた）、主に片仮名で表わされる外来語はもちろん、百科万般の事項に関する語句、専門用語、固有名詞を中心に、現代人の必要とする過去の言語（古語から仏教語等々）に至るまで、常に改訂時における現代の必要を充ててきた。今日、必要としない歴史的過去の言語とそれの伝える情報を削つても、補充せねばならぬ内容は無限に近く多い。きびしい選択を行なつてなお、現代人に必要にして十分の十六万余語とそれに含まれる情報量は、初版時の約三倍にのぼる。

・現代はまさに情報社会である。その現代にふさわしい言葉の意味用法の広がり、外来語の増大、社会用語・文化用語・科学用語の知識は多岐尨大に亘る。本書は可能の限り精選して現代を収め、また、心のふるさとであり、現代のよつて立つ基盤である過去の言語と情報を現在の立場でとらえている。たとえば、中辞典で唯一、漢字表記を常用漢字による現代表記の視点で示し、歴史的表記とともに世上に提供するものも、その現われの一つである。本書が、現代人の知識の宝庫として、実際の言語生活のよりどころとして、生きて用いられることを希望する次第である。われわれは、第六版刊行と同時に、次に來たる現在へ向けて、その歩みを続ける所存である。

この辞書のきまり

目 見出し語について

㊦ 収録した範囲

現代語を中心にして、その他主要な古語を取めた。また、いわゆる百科語や建造物・作品名のたぐいの固有名詞も広く収録したほか、外来語については特に重視した。

㊧ 表記法

① 現代語も古語も、ゴシック活字を使って現代かなづかいで示した。

② 和語・漢語はひらがなで示した。また、外来語および外国の固有名詞はかたかなで示し、長音には「ー」を用いた。ただし、「たばこ」「きせる」などのように、外来語の意識の薄くなっているものはひらがなで示した。

③ 複合語は、語構成に従って適宜「・」でくぎった。現代では単純語と思われるが、語源的には複合語であると認められるものも同様にくぎった。ただし、人名・地名には、これが複合語の一部である場合を除いて、省略した。

やま・みち「山道・山路」 しんぜん・び「真善美」
さか・すき「杯・盃・厄・盃」
こうし「孔子」 とうきょう「東京」
とくしま・ほんせん「徳島本線」

④ 活用語は、原則として終止形をあげ、語幹と活用語尾との間

に「・」を入れた。

か・く「書く」 たか・い「高い」 み・い・る「見入る」

ただし、

(イ) 語構成のくぎりと活用語尾のくぎりとが一致する場合は、

「・」だけでそのくぎりを示した。

あい・する「愛する」 あおぎ・みる「仰ぎ見る」

(ロ) 「そろろう(候・候ふ)」などのように、音が変化して語幹と活用語尾との区別がつかない場合は、歴史的かなづかいのほかに「・」を入れて示した。

そろろう「候・候ふ」

(ハ) 形容動詞および漢字二字以上から成るサ行変格活用漢語動詞は、それぞれその語幹を示した。

しずか「静か」(三形動) うん・どう「運動」

⑤ 和語のうち、現代かなづかいと歴史的かなづかいとでその表記法が著しく異なるものは、特に歴史的かなづかいによる見出し語を示して検索の便をはかった。この場合、見出し語の上に「印がつけてある。

あふぎ「扇」 ↓ おうぎ

⑥ 「いはふ祝ふ」「つかふ(使ふ)」などは、「いおう」「つかう」とも発音されるが、「いわう」「つかう」で示した。

㊨ 配列

① 見出し語のかなの五十音順に従って配列した。

② 濁音・半濁音は清音のあとに、拗音・促音は直音の前に配列した。

じゅう「従」 じゅう「自由」

③ 外来語の長音は、そのすぐ上の母音を重ねて表わした位置に配列した。「ネーブル」は「ネエブル」の位置に)

④ 同じかなの見出しが幾つかあるときは、次の原則によつた。

(イ) 品詞の順

造語成分(++)・接頭語・接尾語・感動詞・助詞・助動詞・接統詞・副詞・連体詞・形容詞・動詞(五段・四段・上一段・下一段・上二段・下二段・変格活用)の順)・形容動詞・代名詞・名詞の順とし、連語を最後に置いた。

(ロ) 同じ品詞の中では、

i 和語・漢語・外来語の順

ii 見出し漢字の、最初(または二番目)の漢字の画数の順

iii 外来語では、原語つづりのアルファベットの順

iv 普通名詞・固有名詞の順

⑤ 複合語のうち、最初の三音節以上にあたる部分が既に見出し語として示してある場合には、その同音の部分を一「」で表わし、その見出し語に続けて示すことを原則とした。この場合、最初の見出しを「親見出し」、それに続ける見出しを「子見出し」という。

あたま「頭」 — うち「打ち」 — かず「数」

ただし、

(イ) 漢語の場合には、二音節でもそれが拗音を含む漢字二字から成る複合語(熟字)ならば、それを親見出しとした。

む・しゃ「武者」 — え「絵」 — まど「窓」

(ロ) 人名の場合には、二音節以下でも親見出しとした。

ノア 「『ノの方舟』」

⑥ 同じ親見出しに、複合語と、慣用句・ことわざなどの連語とが子見出しとしてあるときは、連語を複合語の前に配列した。

この場合、連語を『』で囲み、かな見出しは示さなかった。

のれん「暖簾」 『『に腕押し』』 『『を分ける』』

— し「師」 — な「名」

歴史的かなづかいについて

見出し語の下に、見出し語のかなづかい(現代かなづかい)と異なる歴史的かなづかいを小字で示した。

あおい「葵」 か「く」「菓子」

ただし、

(イ) 子見出しの際は、親見出しの部分の歴史的かなづかいを省略した。

おどり「踊り・躍り」 — あがる「上がる」(自五)

(ロ) 字音かなづかいのうち、水・追・唯・類などのたぐいは「すい」「つゐ」「ゆい」「るゐ」とすべきとの説もあるが、従来に従って「すゐ」「つゐ」「ゆゐ」「るゐ」とした。

三 見出し漢字について

見出し語の、漢字を使って書くときの表記法を「一」で囲んで示した。なお、「PTA」「UNESCO」など、ローマ字で書くことが一般に行なわれているものもここに示した。

① 漢字の字体については、常用漢字字体のほか人名用漢字字体を使った。(付録「人名用漢字別表」参照)

② 漢字にはそれぞれ次のような印をつけて、常用漢字およびその音訓との関係を示した。

(イ) 無印の漢字は、常用漢字表にあり、そこで認められている音・訓によるものである。

さか・みち〔坂道〕 あん・か〔行火〕

(ロ) (印)の漢字は、常用漢字表にないものである。

かさ〔笠〕 あん・こく〔暗黒・闇黒〕

(ハ) (印)の漢字は、常用漢字表にあるが、その音・訓が認められていないものである。

おさ〔長〕 はた〔端・側・傍〕
ちか・うみ〔誓う・盟う〕

(ニ) (印)の漢字は、その音・訓は常用漢字表に認められているが、普通には、かな書きにすることが多いものである。

なお、本文の脚注では、その旨を「かながきでもよい」と記してある。

じき・に〔直に〕 ところ・が〔所が・処が〕

なぞ・かけ〔謎(掛け)〕

ただし、これは主として現代語を書く場合の規準であるので、用言の口語形には示したが、文語形にはつかなかった。

つめ・か・ける〔詰め(掛け)〕 つめ・かく〔詰め(掛)く〕

(ホ) 漢字二字以上に連続して同じ印がつくときは、次のように示した。

たこ・つば〔蛸壺〕

さか・つ・こ〔造酒児〕

いっ・さい〔一切〕

(ハ) …印は、いわゆるあて字または熟字訓であることを示す。

なお、これらを含む複合語は、「ニ」であて字・熟字訓との部分をくぎった。また、作品名・人名・地名などの固有名詞に、常用漢字表にない漢字や音訓を用いた漢字が含まれている場合にも、便宜…印をつけて、いちいちの漢字に(・へなどの印をつける煩わしさを避けた。

しくじり〔失敗〕

へたくそ〔下手・糞〕

なた・まめ〔鈍豆・刀豆〕 ーぎせる〔煙管〕

めいぼく・せんだいはぎ〔伽羅先代萩〕

しゃ・か〔釈迦〕

はこだて〔函館〕

③ 子見出しの漢字見出しで、親見出しと共通する部分の漢字は、「ー」で示した。

てい・き〔定期〕 ーよきん〔預金〕

④ 一語に幾つかの意味をたてた場合、主としてそのうちの特定の意味にだけ使われる漢字表記は、その意味の初めに示した。

う・ける〔受ける〕 ①… ④〔承ける〕…

⑤〔請ける〕…

⑤ 「送りがな」については次のように扱った。

(イ) 内閣告示の「送りがなのつけ方」に例示されている語はそれに従い、その他はそれを参考にした。(ハ) 内のかなは、送らなくてもよいかなを示す。

おこない錠〔行(な)い〕 おこなう錠〔行(な)う〕

(ロ) 見出し語が古語または文語の場合は、歴史的かなづかいで

送りがなを示した。

うけ^{うけ}う^うめ^め〔析ふ・誓ふ〕

お^おう^うま^ま〔生ふ〕

- (ハ) 活用語を含む複合語の場合、常用漢字表にない漢字の部分の送りがなは省いたが、活用する語にはその活用語尾を送った。

かき^{かき}なて^{なて}〔掻撫〕

かき^{かき}まわ^{まわ}す^す〔掻回す〕

ゆき^{ゆき}たがい^{たがい}〔行き・違〕

ゆき^{ゆき}たが^{たが}う^うが^がい^い〔行き・違ふ〕

〔行き・違ふ〕

品詞・活用などについて

見出し語の品詞・活用など文法的な機能からみた性質は、(一)で囲み略語で示した。(次々ページ「略語・記号表」参照)

- ① 名詞は、その指示を省略した。ただし、特に必要があるときは示した。

- ② 漢語名詞で、「する」をつけてサ行変格活用の動詞として使われるものは、見出し漢字の下に「^{する}」と示した。

べん^{べん}き^きよう^{よう}め^め〔勉強〕

- ③ 形容詞は、いわゆるク活用・シク活用の形容詞にはそれぞれ(形ク)(形シク)と示したが、口語形容詞は(形)とだけ示した。

- ④ 形容動詞の語幹には、ナリ活用には(ニ形動)、タリ活用には(ト形動)と示した。

し^しず^ずか^か〔静か(ニ形動)〕

どう^{どう}・どう^{どう}ぎ^ぎ〔堂堂(ト形動)〕

- ⑤ 助詞は、格助詞・副助詞・係助詞・終助詞・間投助詞・接続助詞の六種に分けた。

五

語釈・解説について

- ① 見出し語の意味または事柄については、なるべくわかりやすいことばで的確・簡潔に記述するように努めた。

- ② 一語に、現代使われている意味のほかに古語特有の意味があるときは、「古」として記述し、多くは現代語の意味のあとに置いた。「古」の指示のない意味には、現代語と古語とに共通するものもあるから注意されたい。

すこぶる〔頗る(副)〕①はなはだ。非常に。「―迷惑だ」

②〔古〕少しばかり。「これはただ―覚え侍るなり」〔大鏡・時平〕

鏡・時平〕

- ③ 用言で、いわゆる口語形と文語形とが対応するものは、口語形の見出しに語釈・解説をつけた。この場合、見出し語の下にその文語形を示した。ただし、五段活用に対して四段活用を示すことは省いた。

ながめる〔眺める(他下二)〔文語ながむ(下二)〕

- ④ 意味の理解を助けるために、語釈・解説の始めに

(イ) (一) (一)で囲んで、語源的・語義的説明や発音の変化、

用法などを示した。また、外来語や外国の固有名詞の原つづ

りやその意味などもここに示した。この場合、ドイツ語・フ

ランス語・ポルトガル語などは、^{ドイツ}・^{フランス}・^{ポルトガル} のようにし

したが、英米からの外来語にはその原籍を省いた。いわゆる

和製英語のたぐいは、和で示した。原つづりの中で、イタ

リックで示した部分は国語の発音に表われない部分を示す。

(ロ) (一)で囲んで、宗・法・哲・枕・古など、その語の使わ

れる範囲(位相)を示した。「古」は、いわゆる古語をさし、

⑤ 主として奈良時代から江戸時代までの文献に見える語で、現代共通語では使われなくなったと思われるものに示した。
表記・体裁などについては、

(イ) 原則として、現代かなづかい・常用漢字・送り仮名の付け方によった。それ以外の漢字を使うとき、または誤読・難読のおそれのあるときは、その読みをつけるようにした。

(ロ) 語釈・解説の分類は、一般には㊦㊧㊨を用い、更に細分するときは、①②…④⑤…などとした。品詞・活用の種類、自動詞・他動詞を区別する場合、助詞の下位分類を示す場合、助詞・助動詞を現代語・古語に分けて解説する場合などには、㊦㊧…を用いた。

(ハ) 解説文の簡明化と紙面の節約を図るため、次のような形式を用いたところも多い。

顔が熱く(赤く)なること。

顔が熱くなること。
顔が赤くなること。 の意

世の中(の)人。

世の中。
世の中の人。 の意

⑥ 用例は「」で囲み、語釈の最後に示した。

(イ) 古語の用例は、できるだけ学習の参考になるものを選んだ。

(ロ) 古語の用例文は、読みやすくするために、原典の漢字をかなに、かなを漢字に改めたところがある。また、かなづかいは歴史的かなづかに統一した。

(ハ) 用例文中、見出し語に相当する部分は、「」で示した。ただし、動詞・形容詞の場合はその語幹だけを「」で表わし、一段動詞・助動詞は全語形をかたかなで示した。

(ニ) 用例の意味を理解する助けとして、(一)で囲み漢字かたかなまじり文で注記した。解釈の場合は(ロ)に入れて示した。

(ハ) 漢字の読みは、古語の用例でも現代かなづかいで示した。用例の出典名は、多くは略称を用いて「」で囲んで示した。そのおもなものは次のとおりである。なお、底本には多く「日本古典文学大系」「日本古典全書」などを用いた。

⑦ (記・上) 古事記・上巻
(推古紀) 日本書紀・推古天皇
(万・三六) 万葉集・国歌大観番号三六番
(古今・春上) 古今和歌集・春の歌上
(枕・一二) 枕草子・一二段(古典大系)
(源・桐壺) 源氏物語・桐壺の巻
(平家・一) 平家物語・巻第一
(宇治拾遺・二五) 宇治拾遺物語・説話番号二五
(徒然・三) 徒然草・第三段 「(古典大系)」
(謡・安宅) 謡曲「安宅」
(狂・粟田口) 狂言「粟田口」
(伽・一寸法師) 御伽草子「一寸法師」
(浄・新版歌祭文) 浄瑠璃「新版歌祭文」
(浮・傾城禁短気) 浮世草子「傾城禁短気」
(滑・浮世風呂) 滑稽本「浮世風呂」
西鶴・芭蕉・近松(門左衛門)の作品については、「西鶴・世間胸算用」「芭蕉・奥の細道」「近松・生玉心中」のように示した。

⑧ 解説の補助として、さし絵を約千五百入れた。

略語・記号表

(接頭) …… 接頭語	(代) …… 代名詞	(古) …… 古語
(接尾) …… 接尾語	(名) …… 名詞	(枕) …… まくらことば
(感) …… 感動詞	(連語) …… 連語	(経) …… 經濟・商業
(格助) …… 格助詞	(五) …… 五段活用	(植) …… 植物学
(副助) …… 副助詞	(四) …… 四段活用	(心) …… 心理学
(係助) …… 係助詞	(上一) …… 上一段活用	(数) …… 数学
(終助) …… 終助詞	(下一) …… 下一段活用	(生) …… 生物学
(間助) …… 間投助詞	(上二) …… 上二段活用	(地) …… 地理学
(接助) …… 接続助詞	(下二) …… 下二段活用	(哲) …… 哲学
(助動) …… 助動詞	(カ変) …… カ行変格活用	(天) …… 天文学
(接) …… 接続詞	(サ変) …… サ行変格活用	(動) …… 動物学
(副) …… 副詞	(ナ変) …… ナ行変格活用	(法) …… 法学
(連体) …… 連体詞	(ラ変) …… ラ行変格活用	(理) …… 理化学
(形) …… 形容詞	(ク) …… ク活用	(論) …… 論理学
(自) …… 自動詞	(シク) …… シク活用	(言語) …… 言語学
(他) …… 他動詞	(ニ) …… ナリ活用	(文法) …… 文法
(形動) …… 形容動詞	(ト) …… タリ活用	(楽) …… 音楽

〔仏〕
……
仏
教

造語成分

歴史的かなづかいによる見出し

常用漢字以外の漢字

常用漢字表に認められていない音訓

常用漢字表で認められてはいるが、
きが普通の語

あて字・熟字訓など

↑
⋮
⋮
の
対

↓
.....
.....を
見よ

↓
.....
.....を参照せよ

外来語で、原籍を示す

外来語は、原つづりの上にツディ
スガルトなどのように示した。

いは、和で示した。

何も指示してないものは英米語である。

原つづりの中で、イタリックで示した部分は、国語の発音に表われない部分を示す。

お

あいしるゐる〔藍汁〕
アイの染料を溶かした汁

— (ice show) 氷上で行なう見せ物。スケータ―

めいすかね・し^{はし}か(形シク)「古^{いにしへ}きよかき

心 愛助王 一 法 經書で

5

